

初めまして、この度は私の制作しました写真集をお買い上げ頂きありがとうございます。  
この写真集は91年3月に端島を訪れた際に撮影したものです。

さて、私と軍艦島との出会いは約36年前に遡ります。当時小学校1年生だった自分ですがNHK教育放送の番組で紹介された炭鉱のある島が軍艦島でした。それ以後、常に軍艦島の名は私の脳裏から離れず、気づくと「いつかは行ってみたい」と思えるようななっていたのです。

そして、多くの方々が衝撃を覚えた有名な公共広告機構のCMで一気に火がついたのですが当時は恐らく中学生の頃だったと思いますが、行ってみる手段がありませんでした。大体この島がどこにあるのかも知りませんでした。しかし、この要塞廃墟と化した島への興味はその後91年に初上陸を果たすまで一度も色褪せたことがありませんでした。

91年3月。私は一路長崎に向けてマイカーを走らせました（軽自動車です）仙台からの道のりは考えている以上に過酷でしたが、それでも片道2000キロを2日でたどり着き島の見える野母崎に到着したのです。

ここからが大変で、浜に着いたもののどういう手段をとって渡ったら良いのか分からず、あてもなく、野々串漁港に行き漁船の船頭さんに相談した結果、5000円で快く乗せてくれました。（ちょうど高島に用事があるから、その帰りにまた寄ってやるよと言われたのです。）

この島、自分が渡っておいて言える立場ではないのですが、基本的には上陸禁止区域です。ですから、実際、浜についても上陸の期待はしない方が賢明です。ただ、この付近は良い漁場らしく、釣り客が多いのも事実です。ですから釣り船に乗せてもらって渡るのが最も一般的と思われます。ただ、万単位での出費は覚悟していて下さい。そして、上陸した際は最低限のマナーを守って島を訪れてください。

撮影時間は約3時間。このたった一度だけのチャンスで仕上げられたのがこの写真集です。軍艦島の写真集というと写真家の雑賀雄二さんが有名ですが、本音を言えば経済力と時間が許せたら負けなくらい良い本を作りたかったです。

しかし、この時点では、まだ本の出版という意識は自分にはありませんでした。仙台に帰って出来上がった写真を眺めているうちに突然、思い立ったのです。

意外に思うかもしれませんが、この写真は全てカラーで撮られたものです。出版を決めたときは、始めカラーの話で進めようと思いましたが単純に経費が掛かるということで見送りました。

廃墟というと、どうしてもモノクロの印象が強いのが現実だと思いますが、私は必ずしも廃墟だからといって、モノクロを推奨しません。やはりカラーとモノクロでは受ける印象も訴える感情も異なるものと理解しています。最近、カラーでの写真集を出された方がいましたが、この軍艦島を題材とした本でカラーが少ないのは残念でなりません。

91年11月 全国出版 限定2000部

自費出版としては注目度が高く、多くの問い合わせを頂きました。しかし、どういうわけか地元九州地区では販売されませんでした。

10年ほど前でしょうか、長崎で閉山20周年記念式典があり、そのイベントに島関係者以外では数少ない招待を受け、当時の貴重な話をたくさん聞くことが出来ました。その式典に来られたお客さん全員にこの本をプレゼントしました。残部は高島の役場か図書館か分かりませんが、公共の施設に寄贈されています。このために500部ほど増刷させていただきました。この時の余剰分と出版した際に全国の書店から乱丁本として返本された分を今回のオークションで在庫整理させて頂いています。

さて、軍艦島に住んでおられた方々からは部外者では知ることが出来ないお話が聞けました。いくつかあげてみようと思います。

### ① 人間関係

この島に住む人たちは皆、家族同然の関係で各家庭に戸締りの必要は無かったようです。この島自体がひとつの建物でそれぞれに部屋がある、という表現がぴったりでしょう。

### ② 経済状態

当時世界に誇る高純度の石炭を採掘していたわけですが、それゆえ石炭がメインのエネルギー社会の礎を築いていたわけです。人口密度も世界一なら生活水準も世界一を誇っていて新型家電品などはいち早く生活に取り入れられていたそうです。

### ③ 暗い過去

ただ、一面では強制労働の実態もあり多くの人たちが命を落としている悲しい過去もあります。また、塵肺問題で労使交渉が激化したことも時代背景としては見逃せません。

いずれにせよ現代日本がこれまで繁栄してこれたのは、このような多くの労働者の努力であることを忘れてはいけません。

軍艦島が無人になって何年が過ぎようとしているのでしょうか？

ここ数年は廃墟ブームもあり賛否を問われていますが、この島に渡って一番驚くのが人為的風化現象です。心無いファンがゴミを置いていたり、むやみにスプレーやペンで落書きしたり、破壊したり焚き火をして、その不始末から火災を起こしたり、レア物と称して島の物を持ち帰ったり、いずれも真の軍艦島の現状でありながら真の姿ではありません。

あるご婦人の話ですが、

「離島が決まった次の日、多くの人たちが本土から島へ上陸してきてね。そして物という物を持って行ったんだよ。人間って悲しいですよ。そして、こんな廃墟と化した自分の故郷を見せられるのは辛い。」

私はその瞬間、自分がしてきたことの愚かさを痛感しました。

誰だって自分の故郷を、しかも人為的に汚されたら、見たいとは思わないでしょう。

私は深くご婦人に謝罪しました。単に懐かしんで欲しいという思いだけだったのですが浅はかでした。私の意志に気遣ってご婦人も謝ってました。

人の本を評論する立場には無いのかもしれませんが最近廃墟を探訪する本まで出ているということですが、自分の本にしても単に行っただけの無い人に対しての欲をあおりたてるピエロの役をやっているのかもしれませんが。

本をオークションで販売しているのには2つの理由があります。

1つは在庫処分なので、少しでも出費を回収したいという本音。

そしてもう1つは、多くの人たちに出来るだけ多くの真実を知ってもらいたい。そんな思いです。ですから出版した際には無かった、このような解説プリントを同封させて頂いています。巷でこの本がプレミア価格で取引されていると正直嬉しいのですが複雑な思いも同居しています。今後も本の状態は良くないですが残っている限りオークションで販売させて頂きます。ただし、私自身のメッセージは必ず付け加えようと思っています。

現在、私は密かに、この本の続編を検討しています。もちろん今度はカラー写真をベースとしてもものです。92年3月に2度目の上陸を果たした私は2時間にも満たない上陸時間で約80枚の映像をブローニー版で撮影しました。もちろん未発表です。この映像と今回の本のモノクロ映像のオリジナルカラー映像を盛り込んだ写真集の制作を考えています。そしてこれが続編であり私の軍艦島の本としては完結でもあります。まだタイトルは決まっていますが仮に「残された航跡Ⅱ—端島への発信」とでもしておきましょうか？

軍艦島の映像を広めたのが1作目なら2作目は私たちの思いを島へ発信する・・・そんな形で、どんな完結を迎えるのかご期待願いたいと思います。

この度は本当にありがとうございました。

軍艦島ファンが純粋な思いで人々の気持ちを理解できる皆さんであることを願っています。そして、良き、軍艦島ファンとしてお互い、この島を見守っていきましょう。

感想はいつでもメール下さい。

廃墟が語りかけるとき

「軍艦島—残された航跡」

著 者 菊地 豊